

この1年、田代安定という男を追い続けている。きっかけは、たった一つ、田代が台湾に最初に来た日本の科学者だったからである。

ご存知のように台湾は下関条約で清国から日本に割譲された。仮設の総督府で始政式がおこなわれたのが110年前の明治28年6月17日。その日を境に、日本から人や物がどっと海を渡ってやってくるのであるが、田代安定は実



はそれよりも前、まだ日清戦争が終結していない時期に台湾の地を踏んでいるのである。いったいいかなる人物だろうという素朴な疑問がそもそもその動機だったが、数少ない資料を探索するにつれ、その波乱万丈の人生に、しだいに魅せられていくこととなった。

田代安定、生まれは、幕末の薩摩藩西郷、大山、大久保といった明治の元勳たちに囲まれて育った。藩校でフランス語

を習い、維新後は東京に出て植物学を学ぶ。ロシアの園芸博覧会に日本政府の委員として参加し、そのままペテルブルクの大学の研究室に残り、欧州をまわって帰国。

沖繩に関心を寄せ、明治15年から20年にかけて先島(八重山・宮古)に3度訪れて大規模な博物学的調査を展開し、多くの動植物の新種を発見するとともに、当地の開発案を政府に提案してい

第十八回

柳本通彦

甦る田代安定の功績

る。当時琉球諸島は、日本の領土に併合されたばかりで、田代はもっとも早期に先島を研究した科学者となった。

そして日本海軍が台湾澎湖島に侵攻するという話を伝え聞くと、西郷従道に頼み込んで軍艦に乗せてもらい、澎湖上陸を果すのである。そのあと、台湾本島に移り、以来およそ30年間、亡くなるまで台湾に定住し、当地の熱帯植物の研究にその生涯を捧げることになる。

田代安定について、その名前は、台湾あるいは八重山研究者の間で語り継がれているが、その人となり、人生の軌跡は謎に包まれている。最初は茫洋としていた輪郭になんとかヒントが合い始めたところに、思いがけず、安定の実のお嬢様と出会ったことができた。また、先日、台湾大学で田代に関する資料がそっくり発見されるというビッグニュースもあつた。

やなぎもと・みちひこ 京都市生まれ、著書に「台湾先住民・山の女たちの聖歌(現代書館)」「台湾革命(集英社新書)」など。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。

台湾大学で発見された資料は、田代の死後、遺族が当時の台北帝大に寄贈したもので、およそ70年を経て日の目を見たものである。さっそく、石垣市史編纂委員で琉球新報の役員をしている三木健氏と、その検分につきあわせていただいたが、手帳や日記、報告集、手書きの絵など数百件にのぼるものであつた。

田代は昭和3年に亡くなっているが、その際、有志の手で新渡戸稲造揮毫によ

る大きな顕彰碑が台北市内に建てられている。それは、彼が当時第一級の熱帯植物学者であり、八重山研究の嚆矢であつたからにほかならない。しかしいま、田代安定の名前は、日本のいずれの人名辞典にもまったく見出すことができな。その死後は、この世からすっかり忘れ去られていたのである。

田代手書きの原稿や日記の束が今になつて出てくるとは、おいどんを忘れてくれるなよと、田代の亡霊がとつぜん21世紀に甦つたよつである。

三木氏は、八重山研究の第一級の資料発見と、感動を隠さなかつた。すでにこのニュースは沖繩中を駆け巡り、この夏には、調査団が大挙して押しかけるのはと、台湾大学図書館は満を持しているところだ。



今回発見された田代のものと思われる鳥のスケッチ